

「発信力」を高める指導の工夫 ～「書くこと」を通して～



那覇市立鏡原中学校教諭

新垣 真寿美

目次

I	テーマ設定の理由	82
II	研究目標	83
III	研究仮説	83
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	83
V	研究内容	83
1	「発信力」について	
(1)	「発信力」とは	
(2)	「発信力」を高める指導	
(3)	「書くこと」の重要性	
2	まとまりのある英文について	
(1)	まとまりのある英文とは	
(2)	まとまりのある英文を書くために基本的な文構造を活用する指導の工夫	
①	『Kyohara Writing』の作成の視点	
②	正しい英文を書く手がかりとしてのフィードバック	
③	授業の流れを意識したワークシートの活用	
VI	授業実践	87
1	生徒の実態	
2	『Kyohara Writing』を活用した指導計画	
3	授業の流れ	
VII	結果と考察	89
VIII	研究成果と課題	93
1	成果	
2	課題	
	《主な参考文献並びに引用文献》	

「発信力」を高める指導の工夫

～「書くこと」を通して～

那覇市立鏡原中学校教諭 新垣 真寿美

I テーマ設定の理由

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような社会に対応できる生徒の育成を目指し、那覇市では平成15年度から、文部科学省の研究開発学校の指定を受けた。これは小学校段階で外国語活動を取り入れ、音声面を中心としたコミュニケーションの素地づくりをねらいとしたものである。

中学校学習指導要領解説外国語編では、改訂の趣旨に、「自らの考えを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある文章を書く力の育成を重視する」と示している。さらに、「書くこと」の言語活動の指導事項は全体的に再編がなされ、新たに次のような内容が示されている。『(イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。』『(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちを書くこと。』『(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。』と明記されている。このように「書くこと」を通して、自分の考えを持ち、表現し、吟味することで自らの考えをさらに豊かにするという、思考の高まりを促す学習にもなる。

本校の現状を見てみると、4月に行った本校独自のアンケートでは、3年生の8割以上が「英語の授業を楽しい」と感じている。その背景には、小中連携において、小学校での「聞くこと」「話すこと」に重点を置いた活動が自信となって、中学校での「読むこと」「書くこと」への活動につながり、英語への興味・関心が高まっていると考えられる。しかし、アンケートの結果から本校生徒の「書くこと」においては、「伝えたいことをある程度、口頭では言えるが、それを正確に英文で書けない」。また、「単語のスペルが書けない」や「語順が分からない」などの課題が見られる。また指導を振り返ってみると、「書くこと」の学習活動において、その手だてを十分に講じることができていなかったという反省がある。

これらの社会的背景・学習指導要領の趣旨や本校生徒の実態から、生徒の英作文に対する苦手意識を少しでも軽減し、英語科の学習活動において、文と文を筋道たててつなげ、文章全体の一貫性を意識して書くことで発信力を身につけさせたいと考えた。

このような課題に対して、「書くこと」に慣れさせるためには、書く機会を多く与えることが必要であると考えた。また、語彙・文型・英作文の指導方法の工夫を通して、自らの考えを書いて相手に伝えることによって、「発信力」を身につけさせたいと考えた。

そこで本研究では、自らの考えを相手に伝えるために書くことを通して「発信力」を高める手だてとして、既習の文法事項を活用することで、「まとまりのある文章」が書けるであろうと考え本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

発信力を高めるために、まとまりのある英文が書けるようにする指導方法を研究する。

Ⅲ 研究仮説

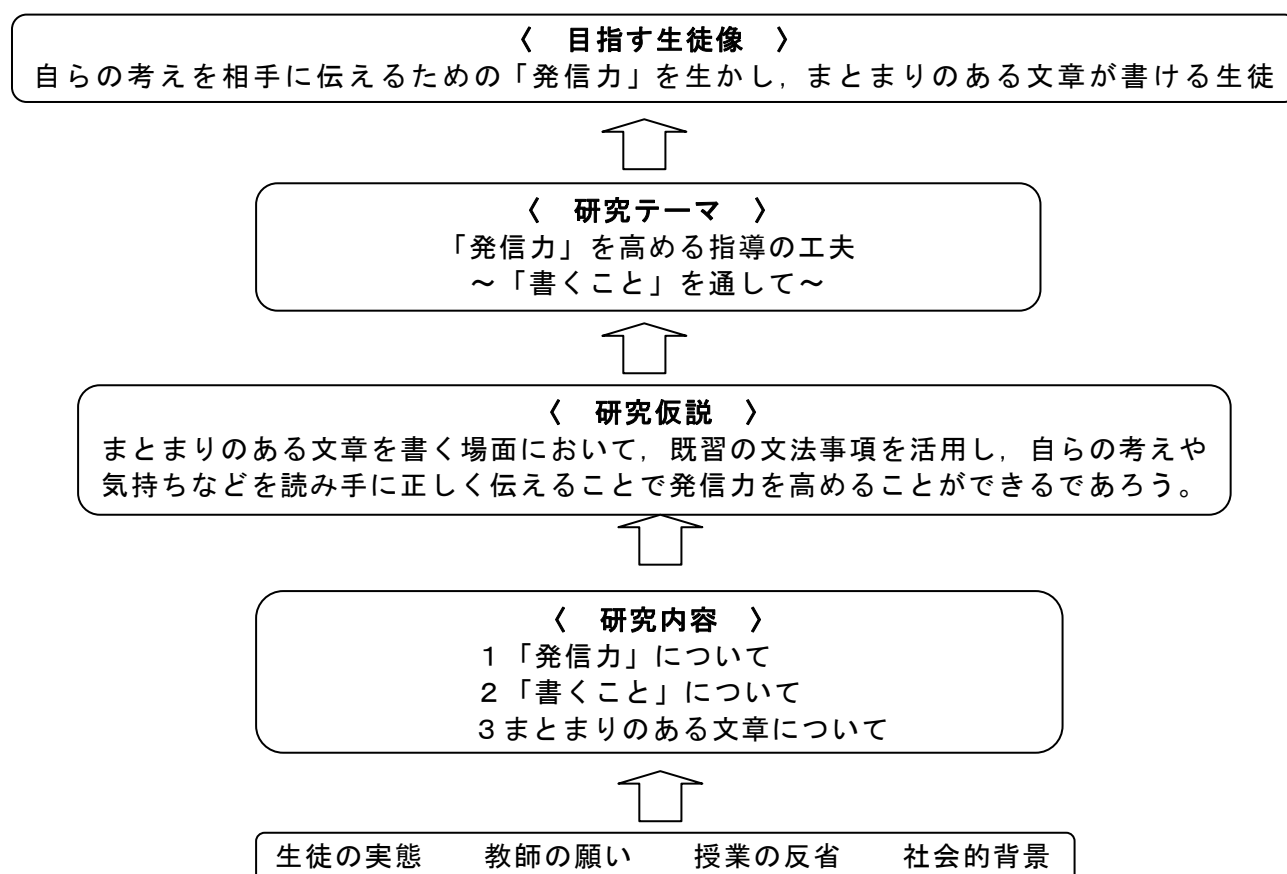
1 基本仮説

まとまりのある文章を書く場面において、既習の文法事項を活用し、自らの考えや気持ちなどを読み手に正しく伝えることで発信力を高めることができるであろう。

2 作業仮説

自らの考えや気持ちなどを相手に伝える場面において、『Kyohara Writing』を活用し、まとまりのある文章を書くことで、発信力が高まるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 「発信力」について

(1) 「発信力」とは

発信力について、平成20年1月に出了れた中央教育審議会答申では「外国語科では、受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』が必要である」と明記している。また、発信力をつけるには、「基本的な語彙や文構造や知識を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した英文

を書く力」が課題であるとしている。

この課題に対し、学習指導要領では改善の4つの基本方針をあげているが、次のことに注目したい。「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等を、自らの体験や考えと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することができるように、4技能を総合的に育成する指導を充実することであるとしている。

また、蓑手浩平(2009)は「発信力とは、学んだ知識・技能を活用し自分の考えを表現する力である。また、聞き手、読み手に伝わるように『自分の言葉』で書く力のことである。」としている。

このことから、学習した文法事項が自己表現する場において、どのような場面で使えるのかを考え、どの表現が自分の考えを表すのに適しているのかを的確に判断する学習が発信力につながると考えた。

(2) 発信力を高める指導

外国語科において、発信力を高めることは重要な課題である。発信力を高めるためには、スペルの多少の誤りにとらわれることなく、文を書くことに慣れ、自分の思いや考えを書くことが必要であると考え。具体的には、①既習の文法事項を活用できる力、②内容のまとまりを考えて書くことができる力、③相手に伝えることを意識して書くことができる力の3つのことである。

蓑手浩平(2009)は、「『書く力を支える構成要素』を、①書く意欲、②文法力、③語彙力、④思考力」と述べている。このことは、書くという活動において、自分の思いを表すために、どの表現が適切であるか、また、内容に合った単語、文構造の選択、文章のつながり、構成など時間をかけて試行錯誤しながら「伝えたい」「書きたい」という気持ちを高める指導である。ここでは、発信力を高めるために、伝わる文章の基本的な書き方を教師が明示し、指導することが不可欠であると考え。

(3) 「書くこと」の重要性

発信力を高めるためには、英語の4技能「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の総合的な育成が必要であるが、ここでは中央教育審議会答申(2009)で課題と指摘されている「書くこと」に重点をおいた。

中学校学習指導要領解説外国語編の示す「書くこと」の具体的な目標は、「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。」とあり、具体的な配慮事項として次の5点が示されている。

- (ア) 文字や符号を認識し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
- (イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
- (エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
- (オ) 自分の気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

ここでは、単に与えられた文を書き写すのでなく、場面に応じて、自分の気持ちや考えを、相手に伝わるように書くことが要求されている。

2 まとまりのある英文について

(1) まとまりのある英文とは

平成 18 年 2 月中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告（以下「審議経過報告」）では、外国語教育改善（理解力・表現力等の育成）の中で、「（中略）与えられたテーマについて、短時間で 5 文程度のまとまりのある英文を書くことができること（中略）」を提案している。また、学習指導要領では「自分の気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、so や then などの接続詞や副詞を使い、文と文の順序や相互の関連にも注意をはらい、全体として一貫性のある文章を書くことが大切である。（中略）また、it などの代名詞や単語を置き換える手法なども適切に用いながら、一貫性の高い文章を作ることができるようにすること。」と明記している。

まとまりのある英文を書くためには、書こうとしている文章全体の構成を構想する必要がある。また、自分が書いた文章を相手に正しく伝えるために、伝える内容を整理することも大切である。ここでは、文法事項を整理し自己関連性の高いテーマを提示し、文章全体の構成を意識したまとまりのある英文の指導につなげたい。

(2) まとまりのある英文を書くために基本的な文構造を活用する指導の工夫

平井早苗(2008)は「教科書の文法事項や語彙の配列を考慮し、既習の文法事項の復習を意識的に行うことが大切である。」と述べている。また、田中武夫・田中知聡(2003)によると、「既習事項を自分に関連づける活動は、学習の定着につながる。また、他者とのやりとりの中から、よりよい表現の仕方に気づく。気づきを促すだけでなく、どのようにすれば自分の考えをまとめ、友だちに分かりやすく表現できるのかを自分で考えてみなければ活動は達成できない。」と述べている。これらのことから、まとまりのある英文を書くためには、「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、基本的な語彙や文構造を活用して、内容的にまとまりのある文章を書く」ことが大切であると考えられる。

ここでは、既習の文法事項を整理した『Kyohara Writing』[資料 1](#)を作成した。『Kyohara Writing』をより効果的に活用してまとまりのある英文を書く際、モデル文を提示することで、生徒の「自分でも書けそう」という気持ちを起こさせることがねらいである。

① 『Kyohara Writing』の作成の視点

- ・ 生徒にとって身近なテーマを選定する。（日記、紹介文、自分のこと）
- ・ テーマについて分かりやすいモデル文を示す。
- ・ 示されているモデル文について、既習の文法事項や英語表現を添える。
（例）I was born in Okinawa.【受動態：be 動詞＋過去分詞（～される）】「ぼくは沖縄で生まれた。」
- ・ 語と語、文と文のつながり方や単語が代名詞におきかえられることの例を示す。
（例）Hoshio was a P.E. teacher in junior high school, but he had an accident when he was 24.
- ・ より豊かな表現が書けるようにするため、順序（時系列）を表す例を示す。
（例）First, I listened to music. Then, I went to baseball stadium.
- ・ 自分の気持ちや考えを表すときの表現例を示す。（例）I was tired.
- ・ 生徒がよく使う動詞の語形変化を表で示す。（例）eat(eats) / ate / eaten / eating

日記

次の4つのポイントに注意して、まとまりのある英文を書いてみよう。

曜日、月日、西暦の順で書きます Sunday, July 5, 2010

② I did my homework in the morning. 時間の流れに沿って書いてもいいでしょう

In the afternoon, Emiri came to my house.

③ We went shopping together and I bought a T-shirt.

⑤ It was fun.

④ After dinner I watched a baseball game on TV for two hours.

具体的に書いたり、感想なども書いてみましょう

慣れてきたら、1文を長くしてみましょう

1 今まで学習した基本英文を効果的に使うと表現豊かな文章になります。

① 曜日、月名はいつでも大文字で書きます。

② 【did my homework「宿題をした」】→決まった表現は覚えておくとう便利です。

③ 【went shopping「買い物に行った」】→go shopping「買い物に行く」熟語も覚えましょう。

④ 【on TV「TVで」、for two hours「2時間」】→より詳しく説明したいときに前置詞を使うと相手に伝わります。

2 順番を表す語を入れると文章が整理され読みやすくなります。例文では で示しています。

「まず・・・、その後(次に)・・・」→ First, I listened to music. Then (Next), I went to baseball stadium.

3 自分の考えや感想を書くと読む人に対して説得力のある文になります。

I was tired. (疲れた) It was exciting. (すごかった) I enjoyed it. (楽しかった)

4 メールや手紙にも使えます。

書き出し→Hi, Kimiyo. (こんにちは君代さん。) Thank you for your e-mail. (メールありがとう。)

本文→By the way, ~ (ところで~) Did you know? (~を知ってた?)

結び→See you. (またね。) Bye for now. (じゃあね。) Say hello to~. (~によろしく。)

英語の絵文字→:-) (笑顔) :-D (大笑い) :-((泣き顔) ;-) (ウインク)

② 正しい英文を書く手がかりとしてのフィードバック

大井恭子(2005)は「フィードバックとは、書き手が正しい英文を書くための気づきである。教師が誤りの訂正をする際は、単に赤ペンで間違いに線を引き、正しい形を提示するだけでなく、一言コメントを書き込むことにより、指導の効果が上がる。」と述べている。ここでは、このフィードバックを生徒同士、教師から生徒へと2度行う。この学習活動は、「受信→(思考・気づき)→発信」という学習プロセスでもある。生徒に「書き直し」をさせ、生徒が友だちや教師からのフィードバックを手がかりにもう一度書くことで、誤りに「気づき」、学習効果が上がると期待される。また、教師は生徒が陥りやすい誤りに気づき、授業に生かすことができる。多様な英文を読む経験が、「このような書き方があったのか」ということに気づき、意欲につながり、自分の考えなどを組み立てて何かを伝えたい気持ちにさせてくれると考える。生徒にとって安心して発信できる環境が必要であるとする。

③ 授業の流れを意識したワークシートの活用

『Kyohara Writing』が活用しやすいようにワークシートを併用する。ワークシートは5段階に分けられている。1時間の流れが把握できるような形式にした。

(例) 日記

流 れ	内 容	意 図
Step1	【個人活動】 週末にしたことを日本語で書いてみよう。	自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように箇条書き程度に書かせる。
Step2	Step1 で書いたものを英語で書いてみよう。	『Kyohara Writing』を活用しながら、1人で英文に直させる。その時、まとまりのある英文になっているかを意識させる。時間の流れに沿って、In the morning ~. など。分からない単語は辞書で調べる。または、ローマ字でもよしとする。
Step3	【学び合い活動 (フィードバック)】 ペア・グループで交換し、Step2 の英文を読んで、間違いなどを赤ペンで直してみよう。	友だちの英文を読むことで、間違いに気づかせる。また、自力で英文が書けなかった生徒は友だちのものを参考にし、まとまりのある英文とはどういう文かを説明する。そして、「書こうと」という意欲を高める。 <u>まとまりのある英文</u> ・モデル文を参考に単語を入れ替えてみる (例) We went shopping. → We went to beach. ・時間の流れに沿って書いてみる (例) In the morning~. ・考えなどや気持ちを選んで書いてみる (例) I enjoyed it.
Step4	Step3 で直したものを清書しよう。	ただ単に、間違いを直すだけでなく、友だちのものも参考にしながら、まとまりのある英文になるよう、書き加えさせる。



(教師に提出)

[次時]

Step5	Step4 で先生が直したものを清書しよう。	教師によるフィードバック。間違いを訂正するだけでなく、できたところには○をつけ、コメントを書く。そうすることで、生徒の次時への書く意欲を高めさせる。
-------	------------------------	--



[最終：第5時]

【Sharing(分かち合い)】 ①クラス全員分を1つにまとめ、原稿（ワークシート）を全員に配布する。 ②発表をする。生徒は書かれた原稿を見ながら、聞く。		①全員が書いた英文を読むことで、多くのモデル文に触れさせる。 ②発表を聞くことで、音声と文字の一致を図らせる。
---	--	--

VI 授業実践

1 生徒の実態

本校の現状を見てみると、4月に行ったアンケートから、「書くこと」における課題は大きい。「単語のスペルが書けない」や「語順が分からない」などがあった。そこで、英文を書く上で基礎となる英文構成力を把握するため、10月に事前テストを行った。その結果から分かったことは次のことである。「文法事項や文構造に関して」と「語順を問う問題」は正答率が約7～8割となっており、定着がみられる。しかし「語彙力」の正答率は約半数で不十分である。さらに、まとまりのある英文を読み取る力」の正答率は約3割で、文と文の前後を読み取る力がかなり不十分である。特に「5文以上の英作文を書く」ことに関しては、無答が約半数と課題が大きい。このような実態をふまえ、『Kyohara Writing』を活用して「書くこと」の課題の克服を図っていく。

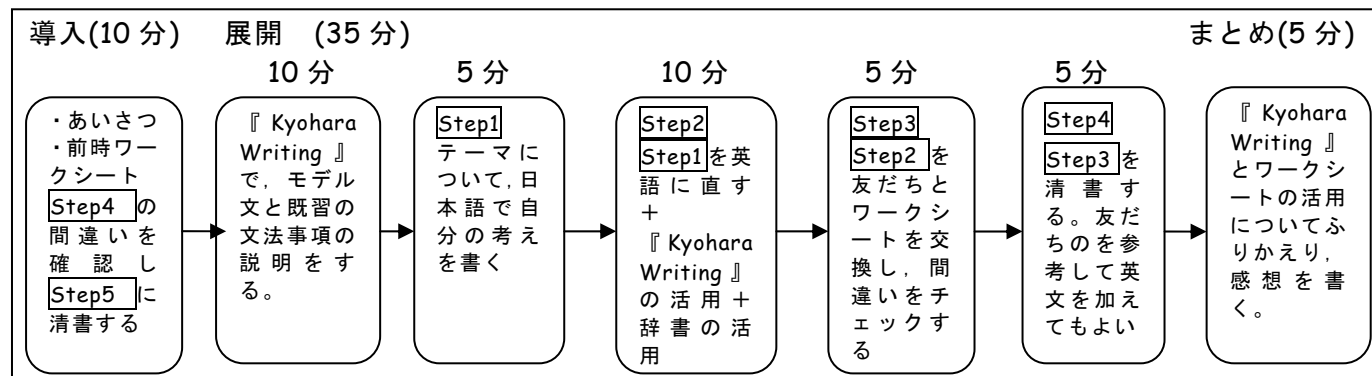
2 『Kyohara Writing』を活用した指導計画

生徒にとって身近なテーマを選び『Kyohara Writing』とワークシートを活用して英作文を書く。3時間の取り組みで仕上がった英作文を冊子にまとめ、各自発表をする。自分が書いた英文をクラスの全員に発信し、また、全員の英作文を読んで受信するというねらいがある。

	主な目標	主な学習内容
第1時	①事前テストで、英語の力を把握する ②英和・和英辞書の効果的な活用ができる	①事前テスト ②辞書を使つての「早引き名人」
第2時	『Kyohara Writing』を活用して日記を書くことができる	①『Kyohara Writing』の使い方を学ぶ。 ②モデル文を参考に日記の形式に従い、構成を考えて、5文を目標に日記を書く。 ③時間の流れを表す英語表現に気をつけ In the morning ~.などを使い、まとまりのある英文を書けるようにする。 ④自分の感想も入れる。
第3時	『Kyohara Writing』を活用して紹介文を書くことができる	①紹介したい物や人について、モデル文を参考にしながら、構成を考え、まとまりのある英文が書けるようにする。 ②I'm going to tell you about~.で始め、何について紹介するかを書く。 ③特徴などをより詳しく伝えるようにする ④代名詞を使うと内容に一貫性のある文章になることを意識させる。 ⑤接続詞を使うと文と文のつながりがよくなることを意識させる。
第4時	『Kyohara Writing』を活用して自分のこと（自分史）を書くことができる	①自分のことを整理し、モデル文を参考に、文のつながりや構成を考えた文章が書けるようにする。 ②過去・現在・未来と時間を追って、英文が書けるようにする。 ③過去形・現在形・未来表現・現在完了形・受動態・動名詞・不定詞などを使って書く。
第5時	①事後テストで、英語の力を把握する ②自分の書いた英作文を発表する	①事後テスト ②全員のワークシート(第2～4時)を冊子にしてまとめ、配布。書いたワークシートを発表する。また発表を聞きながらワークシートを読む。

3 授業の流れ

身近な出来事を日本語で書くことからはじめ、友だちどうしでのフィードバックがスムーズに行うことができるよう、学習の仕方を確認しながら取り組ませた。



VII 結果と考察

【仮説の検証】

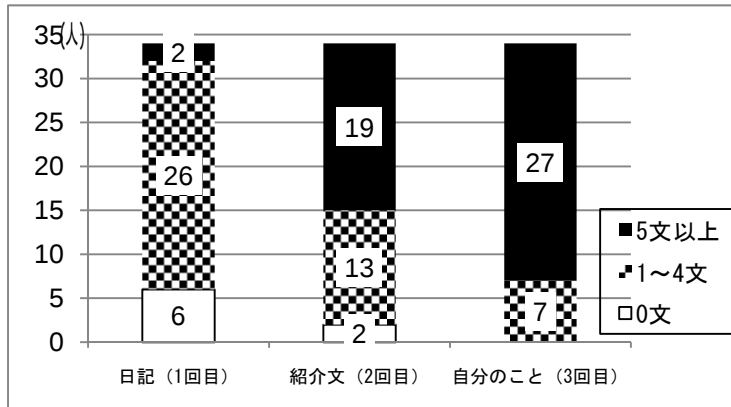
自らの考えや気持ちなどを相手に伝える場面において、『Kyohara Writing』を活用し、まとまりのある文章を書くことで、発信力が高まるであろう。

【手だて1】既習文法事項『Kyohara Writing』の活用

既習文法事項『Kyohara Writing』を活用したワークシートでの英文量の結果と生徒の感想から、『Kyohara Writing』について検証する。

【結果1】

資料2は、生徒が授業で10分程度資料2『Kyohara Writing』を活用した授業1～3回目の英文量の結果(34名)『Kyohara Writing』を活用した第1回目から第3回目における英文量の変化を示したものである。5文を目標に書かせ1回目の「日記」を書かせたときは2人2回目の「紹介文」19人、3回目の「自分のこと」27人となった。3回目には約80%の生徒が5文以上の英文が書けるようになった。



また、平均値で英文量を表すと、1回目3.7文、2回目4.0文、3回目4.4文と授業をするごとに英文量が増えた。

資料3 『Kyohara Writing』とワークシートを活用した生徒の感想

資料3は、『Kyohara Writing』とワークシートを活用して英文を書いた授業に対して生徒がどのように評価したかのアンケート結果である。約80%の生徒が『Kyohara Writing』が役に立ったと答えている。ワークシートに関しては『Kyohara Writing』と一緒に使うことで、約90%の生徒が使いやすかったと答えている。

『Kyohara Writing』のよい点

- ・今まで習った文法がまとめられていて、説明や解説がついていてわかりやすかった
- ・何に気をつけて書けばいいのかわかった
- ・書き方の例文を見て、自分の考えに当てはまる単語に書き直せば書けるようになった

ワークシートのよい点

- ・書く順序があったので書きやすかった
- ・最初に日本語を書いて、それを基にして自分の書きたいことが英語に直せてよかった
- ・最後に先生が直してくれるので、自分の書いた英語に自信が持った。次からはもっと長い文が作れるようになりたい

資料4は、次の3点に注意することで、単元の流れの中で生徒の変容が見られた例である。英文を書くときに、①授業の流れを意識したワークシートを活用すること②テーマを身近な話題としたこと③日本文→『Kyohara Writing』の活用→英文という流れで取り組ませること。

資料4 抽出生徒の変容例

1 時間目

「中学校生活で思い出に残っていること」

めあて 自力で書く

5文を目標に書かせたが、話をふくらませることができず終わっている。

We went to Fukuoka last year.
It was interesting.

2 時間目

「日記」

めあて 時間の流れを意識して書く

日記の書き方として、曜日・月日を右上に大文字で書けた。単なる、過去形にならないように、時間の流れ(In the morning/ In the eveningなど)を意識している。I enjoyed it.と、自分の気持ち書いている。

Step 5 Step 4で先生が直したものを清書しよう。Sunday, December 5th
In the morning, I took an examination at J.
In the evening, I talked with Mizuki and Mr. Tanaka. We talked about volleyball.
In the night, he took me to the monorail station. I enjoyed it.

3 時間目

「紹介文」

めあて 読み手を意識して書く

I'm going to tell you で始め、何について書くかを明確にする。代名詞の活用 Mikako→she, 接続詞の活用 but/ when で内容にまとまりがみられる。

I'm going to tell you about Mikako.
She is a quiet person. But she can study.
I'm happy when we're together.
She is good at playing softball. * very;
She can play dodge ball.

4 時間目

「自分のこと」

めあて フィードバックができるようにする

既習の英語表現を使って書けた。(例 was born<受動態>have played~since<現在完了形>want to<未来表現>など)

また in Okinawa on February 15thなどの前置詞も正しく使われている。

3 べアで交換し、Step 2の間違いなどを赤ペンで直してみよう。(例) Mikako
4 Step 3を清書しよう。
I was born in Okinawa on February 15th.
When I was two years old, I ~~want~~ went to Yokohama.
I have played volleyball since I was an elementary school student.
It's very interesting.
I want to play volleyball.

次の資料 5 は、『Kyohara Writing』を使う授業の前と使った後で、生徒の「書くこと」におけるスキル面での変容についての事前・事後テストの結果である。

資料 5 「書くこと」における事前事後テスト結果

実施時期：事前テスト 12 月 2 日 / 事後テスト 12 月 22 日 対象：3 年 3 組 34 名

各問題の正答率(%)			
問 題	事前テスト	事後テスト	前後差
1 基本的な単語の定着度 (例) () at this flower.	53.6	72.4	+18.8
2 文法事項や文構造を問う選択問題 (例) I (ア is イ am ウ are エ were) from Okianwa.	74.2	79.3	+5.1
3 語順を問う並べ替え問題 (例) これらの本は英語で書かれている。 (in English / written / these books / are / .)	80.6	93.9	+13.3
4 まとまりのある一貫した文になるように、5 文を並べ替える問題 (例) 簡単な機内放送を読んで、理解することができる。	33.4	42.3	+8.9
5 5 文以上の英作文を書く (例) テーマ「中学生活で思い出に残っていること」(事前テスト) テーマ「将来の夢」(事後テスト) (1～4 文)41.0→53.8 (0 文/書いて誤り)11.7→3.9 無答 41.5→0	5.8	42.3	+36.5

注目したいのが、問 5 の英作文の無答（何も書かない）の変容である。事前テストでは約半数であったのが事後テストではゼロであった。約半数近くの生徒が 5 文以上の英文を書くことができた。

【考察 1】

実際に『Kyohara Writing』を活用した授業は 3 回である。テーマとして「日記」「紹介文」「自分のこと」をあげた。これは、学習指導要領解説外国語編の示す「書くこと」の具体的配慮事項として示されている『(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。』から選んだ。その結果、生徒は自分に関わる身近なことなどで書きやすかったようである。このことは、平均英文量の増加からも分かる。

『Kyohara Writing』を活用した授業の特徴は次の 3 点である。

- ① テーマに対し、モデル文を示し、イメージをふくらませる。
- ② 既習の文法事項を提示することで、自分の考えに合った単語を入れかえることで英文が書ける。
- ③ 語と語、文と文のつながりに注意して、まとまりのある英文を書く手だてとして接続詞や代名詞、副詞また自分の考えなどを表す表現を示す。

ある生徒は、事前テストで I went to go to Kyushu.と書いてあった。「わたしは九州に行った。」と書きたいなら、正しくは I went to Kyusyu.である。あるいは「九州に行きたい」と書きたいなら、正しくは I want to go to Kyusyu. と書かなければいけない。『Kyohara Writing』では生徒が英文を書く時によく使う単語や表現、間違えやすい単語や表現 want と wentなどを学習した。その結果、事後テストでは、I went to Tokyo with my family for the first time when I was thirteen.「13 歳の時、初めて家族で東京に行った。」と書けた。間違えやすい動詞も適切に使い、前置詞の with、副詞句の for the first time、接続詞の when を使うなどが見られた。事前テストでは単文でしか英文を書けなかった生徒がさまざまな既習の英語表現使い表現豊かな複文（1 文の中に主語と動詞

の組み合わせが2つある文)にできた。

また、ワークシートの内容は、1枚を5つのStepに分け、生徒が何度も考えて書く時間を作った。Step1で、自分の書きたいことを日本語で書く。Step2で『Kyohara Writing』を参考にしながら、自分の考えに合った表現や見えそうな表現を使い、Step1で書いた日本語を英語に直していく。そして、友だちや教師からフィードバックをしてもらい繰り返し書く活動を通して英文の書き方を学んだと考える。

資料5の生徒のスキル面の変容について、次のことが考えられる。問1について、英文を書く場面において、分からない単語を繰り返し辞書で調べることや、友だちのフィードバックを繰り返す行うことで基本的な単語の定着につながったと考えられる。問2の、基本的な動詞の時制についてはやや定着がみられる。問3のワードオーダー(語順)については、約90%の生徒が教師からのフィードバックで正しい語順に慣れ、基本的な英文の語順「主語＋動詞」の構造を理解できたといえる。問4は、中学2年生の教科書から飛行機の搭乗時の機内放送の問題である。機内放送の内容全体を理解し、文脈の流れから文を並べかえる問題であった。事前テストで正答率が低かったので、あえて事後テストでも同じ問題を出題した。しかし、前置詞をうまく読み取ることができず、正答率は半分に達しなかった。問5の英作文を書く問題では、生徒が3時間の『Kyohara Writing』の授業でモデル文や既習の英語表現を活用し、まとまりのある英文として接続詞や代名詞、副詞、自分の気持ちや考えを書いていた結果である。また、「分かる単語をつなげて何かを書こう」という意欲がみられた。

このように、既習の文法事項を整理した『Kyohara Writing』の活用とワークシートを使つてのフィードバックを通して、生徒の「書くこと」におけるスキルが伸び、発信力が高まったと考える。

【手だて2】正しい英文を書く手だてとしてのフィードバック

自らの考えや気持ちなどを相手に伝える場面において、ワークシートから生徒間のフィードバックを検証する。

【結果2】

友だちどうしでワークシートを交換し、お互いでフィードバック(添削・アドバイス)を行わせた。その後、ワークシートを回収し、教師がフィードバックを行った。次時で生徒にワークシートを返却し、清書させた。その結果、意識調査から、「友だちのワークシートを読みましたか」という質問に約80%の生徒が友だちの書いた英文を読むことができたが、「友だちのワークシートに書かれた英文に訂正をしましたか」という質問には約60%の生徒しかフィードバックを行うことができなかった。資料6は、生徒がフィードバックを行った例である。

資料6 フィードバックの例

- ① I was graduated from Uehara elementary school. → I graduated from Uehara elementary school.
- ② I am playing soccer. → I am playing soccer.
- ③ He likes soda And he is good at P.C. → He likes soda and he is good at using P.C.
- ④ I was fan. → It was fun.
- ⑤ I break kossetsu when 12 years old. → I broke my arm when I was 12 years old.

①・②は動詞を訂正できた。③は文中の大文字を小文字にさらに using を加えることで、より表現を豊かにできた。④は主語と動詞の一致とスペルミスを訂正できた。⑤は動詞を過去形に、ローマ字を英語に直し、さらに主語と動詞を書き加えることがで、正しい英文ができた。

【考察 2】

自らの考えや気持ちなどを相手に伝える場面において、フィードバックをすることで生徒の変容から次のことが考えられる。

成績上位生徒

- ・成績下位生徒への学習を手助けすることで、間違いに気づき訂正を行うことで自信ができた。
- ・成績上位生徒の英文を読んで、よりよい英文を書こうという意欲がみられた。

成績下位生徒

- ・成績上位生徒の英文を読んで、簡単な単語をつなげて英文ができるなどのヒントを覚えてもらうことで、書こうという意欲がみられた。しかし、書かれている英文の間違いに気づくことはできなかった。
- ・成績下位生徒同士だと、フィードバックはできなかった。しかし、友だち英文を見て刺激を受け「自分の力で書けたのがうれしい」と授業後の感想であったので「もっと書こう。やってみようかな。」という意欲の変容がみられた。

生徒の変容から、成績下位生徒への「書く」意欲の変容が大きくみられた。友だちからのフィードバックをもとに英文を清書するが、この時点では、清書をするだけで正しい英文になっているかどうかあいまいである。そこで、最後に教師がフィードバックを行う必要がある。教師は書かれた英文に対し間違いを訂正するだけではなく、例えば「過去形だけでなく、現在完了形も使ってかくことができましたね」と学習の成果を認め、「a を an に直すことができましたね」とフィードバックができたことなどのコメントを書いた。また、習った単語や簡単な英語表現、特に、まとまりのある英文を意識させるため、接続詞や副詞、代名詞を提示した。また、最後に教師からのフィードバックがあることで安心して英文を書き、みんなに読んでもらう安心感につながったと考える。このように、1つのテーマをまず自分で書く、次に友だちに見てもらって書く、最後に先生に見てもらって清書するという、何度も書き直すというフィードバックを取り入れた学習活動は、語彙力や文法力、まとまりのある英文を書く力を高める指導として有効であった（資料 5 参照）。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 既習の文法事項『Kyohara Writing』を作成し活用することで、自分の考えや気持ちを加えながら、まとまりのある英文を書こうという意欲が高まった。
- (2) 『Kyohara Writing』を活用して、ワークシートを工夫し、フィードバックを行い、間違いの「気づき」と「書き直し」を繰り返すことで英文量が増え発信力を高めることにつながった。

2 課題

- (1) 様々な場面において活用できる『Kyohara Writing』の作成および改善を行う。
- (2) フィードバックの工夫・改善を行う。

《主な参考文献並びに引用文献》

『中学校学習指導要領解説 外国語編』	文部科学省	開隆堂出版株式会社	2008
『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』	平田和人	明治図書出版株式会社	2008